

建設業からの参入による定休型ヘルパーを活用した 「ゆとりある肉用牛繁殖経営」を目指して

末吉久美・富美子（肉用牛繁殖経営・長崎県松浦市）

地域の概況

経営主が居住する松浦市は、長崎県の北松浦半島の北東部に位置し、北は玄界灘から伊万里湾に面し、東は佐賀県伊万里市に接している。また、有人離島では、伊万里湾の沖合に浮かぶ黒島・飛島・青島の3島を有しており、市域南側の内陸部は溶岩台地の丘陵地で、平地は少ない。総土地面積は131km²で、「松浦党」発祥の地、「アジ」水揚げ日本一を誇る都市として知られる。

人口は、平成31年4月末日現在22,503人で、就業者数11,413人の内、農業者は1,016人(8.9%)となっている。

平成26年から平成30年の年間平均降水量は2,096mmで、年間平均気温16.6℃、年間平均日照



末吉久美・富美子夫妻

時間 1,767 時間の温暖な気象条件の下で、耕地面積 2,110ha のうち約 4 割の 788ha を畑地が占め、豊かな自然や地理的条件を効果的に活用して営農が行われており、特に、水稻、肉用牛（繁殖）、露地野菜（ブロッコリー、スナップエンドウ）、施設

野菜（メロン、アスパラガス）、果樹（ぶどう、みかん）を中心とした複合経営が営まれている。松浦市の平成28年の農業産出額は413千万円で、その内、耕種が222千万円(54%)、畜産が191

（表1）経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
平成15年	建設業	繁殖牛1～4頭	30(水田)	・繁殖1頭から飼養開始 ・半年後に3～4まで増頭
24年	建設業 肉用牛繁殖	3～4頭	100(水田)	・ミカン畑(廃園)を自力で造成 ・牛舎、堆肥舎等を独力で建設（市単事業を活用）
18年	建設業 肉用牛繁殖	7頭	300(水田)	認定農業者に認定。
20年	建設業 肉用牛繁殖	10頭	同上	放牧1ha開始
23年	建設業 肉用牛繁殖	33頭	400(水田) 400(WCS)	新規就農者実践農場のインストラクターに就任
25年	建設業 肉用牛繁殖	同上	1,000(水田) 400(WCS)	妻が長崎県農業士に認定
26年	建設業 肉用牛繁殖	同上	同上	建設業(公共事業分)を中止
27年	建設業 肉用牛繁殖	同上	同上	上志佐地区和牛改良組合長に就任
28年～	建設業 肉用牛繁殖	43頭	同上	松浦和牛定休型ヘルパー組合を設立し、組合長に就任。ハウス資材を再利用した牛舎を建設。 家族経営協定を締結し、夫婦の共同経営として認定農業者に認定。 放牧地3ha(4か所)

松浦市の家畜飼養戸数、頭羽数

項目	飼養戸数	飼養頭羽数
乳用牛	3	71
肉用牛	195	1,989
		651
豚	1	5,525
採卵鶏	1	2,800
肉用鶏	1	75,000

(表 2)経営実績 (平成 30 年)

経営の概要	労働力員数（畜産・2000hr換算）		家族・構成員	2.4 人
			雇用・従業員	0.2 人
	成雌牛平均飼養頭数			43.7 頭
	飼料生産	実面積	1,520 a	
	年間子牛分娩頭数			45 頭
	年間子牛販売頭数	雌子牛（肥育素牛生体販売）		16 頭
雄子牛（肥育素牛生体販売）		22 頭		
収益性	所得率			40.7 %
	成雌牛 1 頭当たり生産費用			506,657 円
生産性	繁殖	成雌牛 1 頭当たり年間子牛分娩頭数		1.03 頭
		成雌牛 1 頭当たり年間子牛販売頭数		0.87 頭
		平均分娩間隔		12.4 ヲ月
		雌子牛	販売日齡	288.6 日
			販売体重	296.9 k g
			日齡体重	1.029 k g
			1頭当たり販売価格	704,324 円
		雄子牛	販売日齡	264.2 日
			販売体重	310.7 k g
			日齡体重	1.176 k g
	1頭当たり販売価格		810,619 円	
	粗飼料	成雌牛 1 頭当たり飼料生産延べ面積		34.8 a
		借入地依存率		94.5 %
飼料 T D N 自給率		62.9 %		

千万円 (46%) となっており、更に畜産の中で、肉用牛が 116 千万円 (61%) を占めている。

経営・技術の特色

1. 経歴 (建設業から新規参入へ)

経営主は、昭和 48 年に有限会社末吉重機を設立し、昭和 58 年には従業員 20 名まで拡大し、順調に建設業を営んでいたが、その後のオイルショックや公共事業減少の影響により、平成 12 年頃から事業規模を約半分に縮小せざるを得ない状況となり、新たな事業展開を模索していた。



放牧場と自由に出入りができる手作り牛舎

そのような中であって、平成 15 年に経営主の妻の妹が離農者から黒毛和種繁殖雌牛 3 頭を購入したものの、内 1 頭が牛舎に収容できず、相談を受けた妻が、建設業の縮小により時間に余裕があり、動物好きであったこともあって、その 1 頭を引き受け飼養することになった。

その半年後には黒毛和種繁殖雌牛を 3~4 頭に増やし、このころから、土木と比べ、天気の影響をほとんど受けないこと、収入が安定していること、すぐ現金が入ってくること等で肉用牛経営に魅力を感じるようになった。

その後は、経営の推移のとおり、これまで培った建設業のノウハウを生かして、父が所有していたミカン畑 (廃園) を妻とともに自力で造成し、地目を変更した後、建設業で不要となった材料やアスバラガスのハウス資材を利用して自力で牛舎を建設し、市の単独事業を活用しながら徐々に牛舎を改造、改築し、飼養規模を拡大していった。

2. 肉用牛改良への貢献

全国和牛登録協会和牛振興委員を引き受け、更に上志佐地区和牛改良組合長に就任し、飼養管理技術の向上と肉用牛の改良増殖に資するとともに組合員相互の連絡協調を図っている。その結果、全国和牛登録協会が公表している平成 29 年の平均分娩間隔において、長崎県は全国第 2 位の成績 (396 日) であるが、同組合は県平均以下の 395.2 日となっており、肉用牛改良への貢献度は高い。



ミカン畑(4ha)を放牧場に転換



ハウス資材を再利用した育成舎



溜め型水槽が主体であるが、育成牛は販売先も考慮してウォーターカップも馴致

3. ゆとりある経営の実践

経営主は、建設業時代も含めて、ゆとりのある経営を常に目指しており、肉用牛を飼養するにあたっては、妻とともに休日設けるために、平成26年の認定農業者の研修や平成27年の上志佐地区和牛改良組合の研修で大分県の先進事例を学び、県や市、JAの協力のもと、平成28年に定休型ヘルパー組合を設立し、自ら組合長となり、更には定休型ヘルパー組合九州サミット準備会の副会長として、地域はもとより、九州の肉用牛の発展に貢献している。

4. 経営方針

経営主の経営方針は、「日々の飼養管理の積み重ねの重要性」をモットーとした以下の4本である。

①低コストと補助事業の活用

- ・牛舎1棟（60頭規模）、たい肥舎、ワラ倉庫は、建設業で不要となった材料を利用して自力で建設し、松浦市の単独事業を活用して徐々に牛舎を改造、改築するなど、初期投資を抑えた。
- ・牛舎1棟（20頭規模）は、アスパラガスのハウス資材を再利用し、松浦市の単独事業を活用。
- ・スタンションは離農者から譲り受け再利用し、北九州くみあい飼料の補助事業も活用。
- ・成雌牛への粗飼料は100%自給。
- ・増頭や牛舎増改築にあたっては、平成19年度から23年度までの5年間で、松浦市繁殖雌牛1,000頭規模増頭事業を活用。増頭補助額は10万円/頭、「愛妻の牛」は20万円/頭。

②省力化

- ・牛舎に隣接した廃ミカン園等の耕作放棄地4haを運動場として活用しており、更に周年放牧を4頭実施。よって、牛舎の床替えは年に3～4回。
- ・松浦和牛定休型ヘルパー組合の組合員として、月5日利用。
- ・繁忙期の春や秋に地元の人を各時期15名程度臨時雇用。
- ・生後4～5か月の子牛をJAキャトルセンターへ預託（4頭/回）

③生産性の向上

- ・生後5～7日に母子分離を行うことで、母牛の子宮回復を早め、分娩後40日での授精を可能にし、平均分娩間隔は12.4か月という成績である。
- ・子牛は生後2週目にバイコックス投与、1～2か月で牛呼吸器病ワクチン接種。ビオスリーをミルクに混ぜて給与。その結果、下痢はない。スタートを4か月まで、その後ダッシュ給与。飼料は全て購入。キャトルセンターを積極利用。
- ・ホワイトボードや繁殖記録簿により常時受胎状況を確認し、種付けを3回実施しても受胎しない牛は廃用し、更新している。
- ・監視カメラにより、分娩前後の繁殖牛、牛舎の異常時など必要に応じて携帯電話から牛舎の様子を観察し、分娩事故の防止に努めている。



監視カメラによる分娩前後の繁殖牛による事故防止。携帯電話から監視可能

④農業の魅力発信

青年農業者や非農家に対し、魅力ある農業を提示することで農業に対する理解を深めることに力を注いでおり、その具体的な内容としては以下のとおり。

- ・平成23年から毎年農業大学校の学生を受け入れており、その学生は卒業後、就農や畜産関係企業に就職している。
- ・(一社) まつうら党交流公社が実施している農業体験交流に協力し、全国の中中学生や高校生の民泊を行っている。

耕畜連携の活動

①耕畜連携面積（実面積） 3 ha

②2戸の水稲農家とはたい肥と稲ワラ2 ha分の交換を実施している。また、3戸の水稲農家との契約により稲WCS 1 haの収穫、調整を実施。

③昨年までは、耕種農家側からのたい肥の需要に対し、供給量が不足したため、たい肥を外部から購入して対応した。

たい肥舎は現在2棟あるものの、製品を保管するスペースが不足するため、今後1棟を建設（沈殿槽2基を設置予定）し、更に、畜産クラスター事業を活用してマニユアスプレッダーを導入する計画であるため、更なる良質たい肥の生産と面積拡大は可能。

地域に対する貢献

①環境保全に関して

- ・家畜排せつ物の処理については、たい肥舎2棟に全量搬入し、ショベルで3回切り返し、約6か月間かけてたい肥化している。出来上がったたい肥は、ほぼ全量を稲ワラと交換している。

畜舎は、市街地から車で10分程の傾斜の厳しい中山間地に位置し、畜舎に隣接した廃ミカン園などの耕作放棄地を運動場や周年放牧地として利活用しており、環境保全に努力している。また、周辺に住宅は少なく、地域住民との交流や各種ボランティア活動も行っているため苦情は出ていない。

② 耕畜連携等の地域産業への貢献

- ・松浦市認定農業者協議会副会長として積極的に各種活動に参加しており、特に、水田裏を活用して飼料作物を栽培している農家が周辺に多いため、本協議会メンバーとともに溝切作業を行っており、飼料作物の収量増加に貢献している。

③ 地域の雇用、食育等への貢献

- ・繁忙期の春や秋に地元の人を各時期15名程度臨時雇用。
- ・平成23年から毎年農業大学校の学生を受け入れており、その学生は卒業後、就農や畜産関係企業に就職している。
- ・まつうら党交流公社による農業体験交流に協力



たい肥舎建築予定地



放牧場に放たれている牛

し、全国の中学生や高校生の民泊を行っている。

④ 地域の他農家との連携

・松浦和牛定休型ヘルパー組合設立にあたっては、大分の先進事例を自ら学んだ後、約1年で、上志佐地区和牛改良組合内でのアンケート調査によるニーズ把握、組合員や行政、JA と十数回にわたる検討会を実施した後、平成 28 年に設立し、ヘルパー作業員をハローワークで募集の上、1 名を確保し活動を開始しており、経営主がその先導的な役割を担ったため、自ら組合長となっている。

組合員数は設立当初 12 名から現在 15 名まで増えており、更に利用希望者や利用希望回数が増えているため、ヘルパー作業員を 1 名増員している。

ヘルパー組合の効果として、組合員の肉用牛飼養頭数が平成 28 年 171 頭から平成 30 年 187 頭へ増えている。

更には定休型ヘルパー組合九州サミット準備会の副会長として、地域はもとより、九州の肉用牛の発展に貢献している。

生活の視点の配慮について

- ・経営主は、建設業時代も含めて、ゆとりのある経営を常に目指しており、肉用牛を飼養するにあたっては、妻とともに休日設けるために、定休型ヘルパー組合を設立した。
- ・平成 28 年に家族経営協定を締結し、夫婦の共同経営として認定農業者に認定。

将来の方向性について

- ・後継者としては、現在農外へ従事している長男を予定しているが、将来を見据えた時に、昭和 48 年に設立した有限会社末吉重機に畜産部門を加え、法人経営へ転換を図る方向で検討に入る計画であり、継続性の高い肉用牛経営を目指している。